

引用集

「学者渡世 心理学とわたくし」より

(『南博セレクション7 出会いの人生 自伝のこころみ』勁草書房 2004年)

* 少年期(1927-1934：慶應義塾幼稚舎を経て東京高等学校時代)

* 1914年 東京赤坂に生まれる。父親は開業医(南胃腸病院)、癌研究で著名な南大曹
(16)

高校の理科で学び、物理学が一番好きで、寺田寅彦のエレガントな研究にひかれた。数学もデデキントの「切斷」概念などをふくむ理論に魅力を感じた。心理学は、のちに、日本心理学の代表者のひとりとなられた小保内虎夫先生の講義を受けた。フロイトの夢理論批判や「ビヘイビオリズム」の箇所だけが頭に残った。実証的、自然科学的な面にひかれた。いずれも、のちの専門的な心理学の勉強に、どこかで役に立ったような気がする。というのでは頼りないが、生理学に近い研究をやるようになって、発想や論理のはこび方に、自然科学のきびしさが必要だという心がまえは残ったと思う。それから東京大学医学部に進んだが、基礎的な解剖学や生理学の課程を修了しただけで中退した。

* 京都帝国大学哲学科時代(1937-1940)

(18)

自然科学と哲学を媒介するものとして、心理学を、当面の目標にした。(…)ぼくが入学した1937(昭和12)年のころ、西田幾多郎先生は、大分前、1929年に定年で退官され、その後継者である田辺元先生が、哲学科の主任教授であり、田辺哲学が西田哲学とならんで、哲学界の主流となっていた。田辺先生は、もともと自然哲学、数学の素養の上に立って、『科学概論』(1918年)という本も書かれ、ぼくにとっては、自然科学から哲学を考える立場のモデルとして、心ひかれるものがあった。

★ 九鬼周造への傾倒

(44-45)

1939年、3年生の夏には、父が癌研究会理事長として欧米視察に出かけるのに、秘書兼通訳としてついて行った。往路にアメリカでコーネル大学を訪れ、高木貞二先生の紹介によって先生の留学時代の友人で、心理学の主任教授ダレンバック先生にお目にかかった。その頃からアメリカ留学の計画を立てていたのである。コーネル大学訪問の小文は、当時第一書房から出ていた『セルパン』という雑誌に掲載された。

(48)

当時、知りあいの予備海軍中将の老人と、わが家の何かの集まりの席上、激論したことがある。中将は、日本が必ず勝つといい、ぼくは、物量から言っても勝てるはずがないといって譲らなかった。最後に中将は怒って、「君のような非国民がいるから、日本は危ない」と結論した。(…)いずれにしても、そういう「非国民」であり、学生時代に非合法時代の周辺にいて、恐らく、注意人物のひとりだったろうから、あのままでいけば、どんな目にあつたかもしれない。そういう意味では、アメリカ行きも、一種の逃避、大

げさに表現すれば亡命、というよりは、まあ結果的亡命なのである。

*アメリカ留学時代

(1941年－1946年：コーネル大学、1946年－1947年：コロンビア、ニューヨーク大学)

(58)

開戦後まもなく、イサカから遠くない町で、一世の日本人老夫婦が、戦争で頭に来たアメリカ人のバーテンに猟銃で射殺される事件がおきた。友だちはみんな心配して、「オレの部屋に隠れている」とか「ドアの鍵を嚴重にしろ」とかいった。ぼくは、どうせ殺されるのなら「寝ているあいだに一発でやられる方が楽だから」と思って、それ以後は、鍵をかけないで、だれでも侵入して、ぼくを殺すことができるようにしておいた。

(67)

日本の大学とちがって、地位はちがっても、研究者としてはみな同等だということだから、討論になると先生にも遠慮なく批判の矢をあびさせる。先生方も時にはムキになって反論し、声が高くなることもあった。しかし、いったんゼミが終わって、最後のお茶の時間になると、今までのフィーバーはどこにいったのかと思う暗い、うちとけあって、和やかな雰囲気の中に解散する。こういう気分の切りかえがあさりできること、これは学問の世界だけではなく、日常の世界でも日本人が学ぶべき点だと、ゼミのたびに思った。

★ 日本人論の萌芽はアメリカ留学時代に始まる

(91)

当時、ベネディクト教授は、コロンビア大学で講義をしていたはずだが、聞くチャンスがなかった。(…)数年後、帰国してから彼女の前記『菊と刀』が翻訳され、それがぼくの『日本人の心理』(1953)をかくひとつの動機となったことも不思議である。

★ ルース・ベネディクトに触発されたことで始まる日本人論への関心

★ コロンビア大学で日本研究に触れる 角田柳作の知遇を得る「そこで古典的な日本研究書、たとえば(ジョージ)サンソム教授の日本文化史研究などの文献を読みあさった」(91)

★ 「北米新報」(在米ニューヨーク邦人新聞)とのつながり、ジョージ・トッテン(政治学者)との交流を得る

* 帰国、日本女子大学、一橋大学教員時代(1947-1979)

(102)

一橋大と日本女子大の講義が始まるまで、少し時間があつたので、その間にどんな勉強をするかを考えた。そのうちにぼくの研究にひとつの方向を与えるチャンスが生まれた。それは鶴見和子・俊輔姉弟との再会である。(…)ぼくが帰国した時点で、すでに雑誌『思想の科学』が発刊され、日本に新しい学問が生まれつつあった。

★ 「映画の分析：社会心理学的方法」(『思想の科学』1948年7月号)

(104)

(大衆文化研究への関心について) それらの研究には、そのころぼくがはじめた社会調査研究所(現代社会心理研究所)に集まった若い人たちが調査や分析に当たった。ぼくが教えはじめた日本女子大の学生では高野悦子(岩波ホール総支配人)、鈴木初美(セレモニー・コンサルタント)、竹山昭子(成城大学講師)、一橋大学からは、ぼくのゼミの学生で辰濃和男(朝日新聞論説委員)、加藤秀俊(放送大学教授)、中村朗(ビデオ協会理事)、川瀬久(TBS調査部長)、少し時期が下がって、佐藤毅(一橋大学教授)、石川弘義(成城大学教授)、ゼミはちがうけれど、やはり一橋の学生だった平田雅彦(松下電器常務)、田島義博(学習院大学教授)、そうして有吉佐和子(当時、東京女子大、故人)などの諸君がいた。

★ 大衆文化と日本人研究の交差：1950年頃より

(110)

1950年は、ぼくの大衆文化研究と日本人研究とがはっきり結びついてきた年である。この年の二月に、辰濃君たちの強力による共同研究「日本の流行歌」(『思想の科学』)を発表した。これは、流行歌の歌詞の中に日本人の無常感、運命主義、マゾヒズム的傾向などをみた研究であり、このあたりから、日本人の心理に関する研究をしてみようという気持ちが強くなった。

★ 見田宗介『近代日本の心情の歴史 流行歌の社会心理史』(1968)との方法論的相違は？

(110-111)

ぼくは二つの研究方向を問題意識に抱えこむことになった。

そのひとつは、現在までつづいているぼくの日本人論、より正確には、日本人学の研究であり、もうひとつは、日本人に伝統的な美意識の表現である伝統芸術の、理論と実践を結びつける運動として発足した「伝統芸術の会」の運動である。

★ 日本人学への志向 ベネディクトが執筆する際に集めた資料への意見を求められたことがきっかけ
「ぼくにとっては、ベネディクトの資料から、日本人研究の新しいアプローチに目をさまされた思いもしたが、同時に、より精密な社会心理学的な研究、のちにぼくが提唱した「社会心理史」的な見方をとるべきだという気持ちが強まった」

★ コロンビア大学日本研究部門のライブラリーで欧米の日本研究を調べる

(119)

『日本人の心理』では、主として日本人の社会心理史の中できわだっている、自我の弱さ、不幸福感、非合理主義、運命主義、精神主義、義理人情などを取り上げ、それらがしだいに、現代日本人の社会心理の中で変容されていく姿を追ってみた。

敗戦後2年して日本に帰ったぼくのような、いわばアウトサイダー的な人間の目を見た、日本人論は、自分ではそのつもりはなくても、前記のように多くの人びとから、アメリカ的合理主義、近代主義、そして何よりも外から日本を見る客観主義として批判された。

★ 英訳あり、その後、大正・昭和初期(日本モダニズム)研究へ